

主 題：キリストの十分性を脅かす偽りの教え①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章16－17節

テーマ：“キリストの十分性”を惑わせる偽りの教えがどんなものだったか？

今朝、皆さんと再び見ていきたいのは、コロサイ人への手紙2：16－23のみことばです。タイトルにもあるように、キリストの十分性を脅かす偽りの教えについて、今週と来週、恐らく2週かけて一緒に考えてみたいと思います。きょうは特に16－17節を中心に見ていきます。

まずはいつものようにみことばをお読みします。

コロサイ2：16－23

「:16 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。:17 これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。:18 あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、:19 かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。:20 もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、:21 「すぎるな。味わうな。さわらな」というような定めに縛られるのですか。:22 そのようなものはすべて、用いれば減じるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。:23 そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」

さて、少し間が空いてしまったので、これまでに学んできた流れをおさらいしたいと思います。今見ているこのコロサイの教会は、イエス・キリストを信じ受け入れて、そのキリストにあって忠実に歩み続けていこうとしていた教会でした。彼らは信仰においても、愛においても、希望においても称賛されるようなすばらしい信仰者だったのです。でもそんな教会も大きな問題を抱えていました。群れの中に入り込んできたにせ教師たちが誤った教えを広めて、人々の間に混乱が生じていたのです。またキリストを否定して、キリストだけでは救いにおいても、信仰生活においても不十分だという間違った教えは、人々を大切な真理から遠ざける、非常に危険なものでした。こうして人々を正しい道から反らそうとする誘惑や脅威がまさに彼らの身に迫っていました。そのことを危惧したパウロは、彼らに対して警告と励ましを与えていました。少し戻って2：8－9で、パウロは彼らに「:8 あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意なさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものではありません。:9 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。」と語っていました。パウロは愛する者たちに対して「注意なさい」と言っていました。愛する兄弟姉妹たちが「むなしい、だましごとの哲学」にだまされることがないようにと強く訴えていたのです。何の価値もない、空っぽなこの世の言い伝えや教えに心を奪われてしまうのではなくて、満ち満ちているキリストに心を留め続けるようにと励ましていました。キリストのうちにこそ、知恵と知識のすべてがあるから、キリストのうちにこそほかのだれも決して及ぶことのないすべてにまさる力があるから、キリストのうちにこそ神の満ち満ちたご性質がすべて形をとって宿っているから、どんなときもそれぞれがキリストを慕っていなさい、どんなときもそれぞれにとって十分なその存在に目を向けていなさいと励ましていたのです。パウロは人々の目を偉大なキリストの、その主の姿に向けさせていました。

でも、それで終わったわけではなかったのです。パウロはキリストがすべてにおいて十分なお方であるということ、その偉大な姿をさらに明らかにするために、続く11-15節で、その十分な満ち満ちたお方であるキリストが成し遂げた三つのみわざについても触れていました。一つ目は完全な救いでした。二つ目に見たのは完全な罪の赦しでした。そして最後に見たのは完全な勝利でした。かつて神様に対して数え切れないほどの罪を犯して、余りにも大きな負債を負っていた私たち、ただ滅びを待つしかなかった私たちにはどうすることもできなかった罪の問題を、あわれみ深い神様がキリストにあって赦してくださいました。これまでに犯してきたすべての罪が十字架に打ち付けられ、罪のない神の御子イエス・キリストが私たちの代わりとなって罪を背負って死んでくださいました。キリストの十字架こそ私たちの負債をすべて支払うのに十分なものだったのです。言うまでもなく、ほかに付け加える必要などありませんでした。私たちはただ、このキリストの偉大なみわざにあって、十分なみわざにあって、イエス・キリストを信じる信仰のゆえに救いが与えられ、すべての罪が赦されました。そして、この十字架にあって、勝利者として歩いていくことができると言われていたのです。

これが十分なキリストが成し遂げてくださったすばらしいみわざでした。だれも何も付け加えることはできませんでした。キリストこそ、まさに完全ですべてのすべてだったのです。そして、そのことを改めて兄弟姉妹たちに対して思い出させたパウロは、再び彼らに迫っている危険な教えに関して説明を加えていくのです。それがこれから見ていく16-23節の部分でした。「注意しなさい」と言った後に、キリストの十分なその姿を見せて、キリストの十分なみわざを思い出させて、敵の偽りの教えに対して触れていくのです。この16-23節の中に、教会の中に入り込んでいた三つの具体的な偽りの教えを見て取ることができます。そして皆さん、覚えておいてください。この偽りの教えというのは、どれをとっても、キリストに何かを付け加えようとする間違った教えでした。キリストは十分なのだという真理に対して、挑戦しようとする、キリストの十分性を脅かそうとするものが教会には入り込んでいたのです。キリストに何かをプラスしようとする偽りの教えは、この当時の問題だけではなく、今の私たちにとっても大きな問題として見るすることができます。これから見ていくことは、少し難しく感じるかもしれませんが、自分自身のこととしてぜひ一緒に考えてみましょう。

○十分性を脅かす偽りの教え：三つの危険な教え

では、実際にどんな間違ったものが入り込んでいたのか、きょうは一つだけ見ていきたいと思います。

1. 律法主義 16-17節

一つ目の危険な教えは“律法主義”でした。律法主義と聞いて難しそうだと思われた方もいるでしょう。詳しいことはこれから一緒に見ていきたいと思います。でもまず先に、一つだけ定義を紹介するならば、マッカーサー先生が律法主義に関して、このようにわかりやすくまとめてくれました。「律法主義とは、人の達成による宗教です。霊性はキリストに人の行いを加えたものに基づくと主張します。人が作り出した規則に従うことが、霊性を測る尺度となるのです。」と。覚えていてほしいポイントは、律法主義を信じている人々にとって、キリストはすべてではないということです。救いにおいても、霊的成長においても、キリスト+律法を守り行うということ、人の行いというものが欠かせないと、彼らは信じていました。キリスト+人の行い——律法を守り行うということが欠かせない、必要だと信じているのです。そして、そんな教えを信じているにせ教師たちが、当時、コロサイの教会の中に入り込んでいました。彼らは十分なキリストに加えて、さまざまな習慣や儀式といった人の行いを人々に強いていたのです。これは非常に大きな問題でした。16節に「こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。」と記しています。パウロははっきりと警告を口にしていました。ここで用いられていた「批評させ」ということばには、もともと「だれかのあら探しをする」とか、「厳しく非難する」といった意味が含まれています。だれかの態度に対して、批判的な姿勢をとることをこのことばは言うのです。ある聖書注解者は、

このことばを次のように説明していました。「このことばは、人々が同胞に影響を与えようと、習慣的にその人の生き方や行動に対して下す判断に関して用いられ、人を非難するとか、批判するといった意味があります。」と。この判断というのは、当然良い影響を与えるためのものではありません。悪い影響を与えようと、人々に圧力をかけたり、批判的な態度で迫るのです。人のあら探しをしたり、人をさばくような否定的な姿勢をとるということは間違いなくネガティブなものですけれども、それがこの批評されるということばの持っている意味でした。そしてそんなことばを用いてパウロはコロサイの兄弟姉妹に向かってここで警告していたのです。悪い影響を与えようとするとどんなものにも非難されないように、あなた方をさばこうとしている律法主義者から離れていなさいと。

ちなみにこの箇所が使われていた「批評させてはなりません」という動詞には、継続を表す現在形が用いられていました。つまりコロサイの信仰者たちは、このとき彼らを批判するような脅威に常にさらされていたということです。信仰者をさばこうとするような律法主義者たちの働きは続いていました。これはしてもいいです、これはだめですといった彼らの勝手な基準や規則が押し付けられていたのです。だからこそ、それらに対していつも継続して屈しないようにということが求められていました。偽りの教えによって、惑わそうとする者たちとの熾烈な戦いというものは、現実の問題として起こっていたのです。ほかの人をさばこうとする律法主義者たちは、一体どんな点において批判的だったのでしょうか？大きく二つの点が16節では挙げられていました。一つ目は、「食べ物と飲み物について」、つまり食事に関して批判的な者がいたのです。そしてもう一つは「祭りや新月や安息日のことについて」、つまりユダヤ人の祝日・祭日に関して批判的な者がいたということです。この2点に関して、それぞれどうということなのか考えてみましょう。

1) 食事に関して

パウロは最初に、食事に関して触れていました。教会に入り込んでいたユダヤ人のにせ教師たちは、人々が彼らの求めている食べ物の基準に沿っていなければ、それを激しく非難していたのです。でもいったいどうして彼らは食べ物のことに関して批判的だったのでしょうか？そのことを正しく理解するには、少し歴史を振り返ってみる必要があります。ご存じのとおり、かつて旧約時代において神様はご自身の民であるイスラエルの人たちにさまざまな戒め、律法を与えておられました。そしてその中には彼らが口に食べる食べ物に関するものも含まれていました。どんなものがあったか、みことばははっきりと教えてくれていました。レビ11:1-2に、こんなふうに書いています。「:1 それから、【主】はモーセとアロンに告げて仰せられた。:2 「イスラエル人に告げて言え。地上のすべての動物のうちで、あなたがたが食べてもよい生き物は次のとおりである。」と、イスラエル人が食べてよい生き物というのはこんなものですよと、レビ記11章の中に続けて羅列されています。そして最後のレビ記11章のまとめだけ見ておきましょう。「:44 わたしはあなたがたの神、【主】であるからだ。あなたがたは自分の身を聖別し、聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。地をはういかなる群生するものによっても、自分自身を汚してはならない。:45 わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した【主】であるから。あなたがたは聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。」:46 以上が動物と鳥、また水の中をうごめくすべての生き物と、地に群生するすべての生き物についてのおしえであり、:47 それで、汚れたものときよいもの、食べてよい生き物と食べてはならない生き物とが区別される。」と書いてありました。

イスラエルの民に対して、何を食べていいのか、そして何を食べてはいけないのか、そのことがはっきりと神様から戒めとして与えられていたのです。これは何も神様が彼らに対する意地悪のために、嫌がらせのためにしていたものではありませんでした。これはイスラエルが神様に選ばれた聖なる民として、周りの諸外国と区別する目的のためでした。こうやってほかの国の人々と全く異なる生き方をすることによって、彼らが神様から選ばれたことを明らかにしようというのが目的でした。彼らは選ばれた民として、定められた律法に従って自分の身をきよく保って歩いていくことが、神様によって求められてい

たのです。これが旧約の時代、イスラエルの民たちに対して与えられていたものでした。そしてこの基準は、ユダヤ人たちの間で代々守られ続けていたのです。

ある注解書では、そんな彼らが持っていた食事に対する態度や考え方について、こんなふうに描いています。「イスラエルの多くの人々は堅く立って、汚れた食物を食べないことを心に決めていた。彼らは食べ物によって汚されたり、聖なる契約を冒瀆したりするよりは、むしろ死を選んだ。以後、食物の掟を守ることは、国家と宗教に対する忠誠の基本的な印とみなされるようになった。当時、人気のあったユダヤ人の民話に見られるように、英雄やヒロインは、まさに異邦人の食物を食べることを拒否するという点で、神に認められた敬虔さの模範として描かれていたのだ。」と。少し想像してみてください。ユダヤ人たちはどれほどこの戒めを守ることに熱心だったのでしょうか？彼らは汚れるのであれば、死ぬことさえ進んで選択していました。当時、人気のあった民話の中では、英雄やヒロインが異邦人の食べ物を拒否するという点で、神様に認められる敬虔さの模範として、しるしとして描かれていたのです。ですから、彼らにとってこれは欠かせないものでした。彼らは神様に選ばれた民として、律法に従うということに忠実であろうとしていたのです。これはすばらしいことでした。

でも、イスラエルの民に与えられたこの律法は、新約の時代を生きる信仰者に同じように当てはまるものではないということ覚えていてください。どうしてかと言うと、それはこの世に来られたイエス・キリストにあって、律法は成就されたからでした。だからこそ、すでに恵みの下にあるキリストを信じる者たちにとって、食事の戒めは彼らを縛るものではなかったのです。旧約の時代と新約の時代は大きく変わっていました。そして、そのことに関して、地上に来られたイエス様も弟子たちに対してこんなふうに言われていました。マルコ7：18－19で、イエス様は弟子たちに対してこのように言われていました。「：18 イエスは言われた。「あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人に入って来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。：19 そのような物は、人の心には、入らないで、腹に入り、そして、かわやに出されてしまうのです。」イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた。」と。イエス様は、すべての食物はきよいと言われていました。

また、ペテロに対して神様が示されたこともこれと同じでした。使徒10：11－15で、屋上で夢ごちになっていたペテロと神様とのやり取りがこんなふうに記されています。「：11 見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。：12 その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。：13 そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえた。：14 しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」：15 すると、再び声があつて、彼にこう言った。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」と。確かにペテロやユダヤ人であった弟子たちは、最初は困惑していました。それはそうでしょう。なぜなら彼らも同じように食事に関する戒めを守り続けていたからです。外側から入ってくる食べ物によって人は汚れてしまうと、当然のように思っていました。でも、そんな者たちに対して示されたことは、すべての食べ物にきよいということでした。神がきよめられたものをきよくないと言ってはならないということでした。つまり、旧約のイスラエルの人たちに与えられた食べ物に関する教えや戒めというものは、新約時代の信仰者には当てはまるものではなかったと言うのです。キリストにある者にとって、すべての物は感謝していただくことができる、そんな自由がありました。

I テモテ4：3－4がわかりやすく教えてくれていると思いますけれども、そこに「：3 ……しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。：4 神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。」とはっきり言われていました。食べ物は信仰があつて、感謝して受けるのであれば、捨てるべきものは何一つありません。良い物なのだと言われていたのです。

でも、ここで大きな問題が生じたのです。それは律法主義の人たちでした。彼らは自分たちに課されたさまざまな食べ物に関する律法を、それに当てはまらない異邦人の信仰者に対して変わらず課そうとしていたのです。彼らはキリストにあって救われる、それに加えて律法を守ることを強いたのです。みことばがもうすでに良しとしているにもかかわらず、彼らは自分たちの基準や自分たちの好みに反している者たちを批判的に扱い、もしそのような者たちが反することを口にしていようであれば、それらの者たちに対して激しく非難したのです。この律法主義の問題点は、確かにただ単にキリストに行いを加えるということ、これも大きな間違いですけれども、それに加えて彼らは神様の律法から神様を切り離したことに問題がありました。本来であれば、神様に従うべきにもかかわらず、彼らは神様を取り除き、自分たちの外側のふるまいに関心を払い、神様に対する愛も何もその心にはなかったのです。いつの間にか本来あった神様のその目的というものを忘れただけではなく、神様さえ忘れ、自分たちの正しさを主張することに心が奪われていたのです。それが律法主義でした。そしてそんな律法主義は、当然受け入れられるものではありませんでした。神様の基準を超えて、自分自身の自分勝手な基準や判断で人をさばくようなことがあってはならなかったのです。

もちろん、それは食事に関しても、食べ物に関しても同じでした。パウロはローマ14：1-4でも「：1 あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。：2 何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。：3 食べる人は食べない人を侮ってはいけないし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。：4 あなたは いったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」と書いていました。食べることには自由がありました。でも、律法主義者たちは自分たちの基準に基づいてそれをさばき、食事に関して大きな問題を抱えていました。

2) 祝日・祭日に関して

二つ目のことがコロサイ12：16の続きに記されていました。この律法主義者たちは、ユダヤ人の祝日・祭日に関しても大きな問題を抱えていたのです。食べ物の基準だけではなくて、ユダヤのさまざまな祭り事に関しても、コロサイの信仰者たちを激しく非難していました。特に16節では「祭りや新月や安息日」という三つのことばが取り上げられていました。この三つはとても大切なことを教えてくれます。

①祭り

まず「祭り」ということばが最初に出てきています。これは、1年に1回行われていたイスラエルのいろいろな祭りのことを指していました。イスラエルの人たちは、主がなしてくださった恵みや祝福のみわざを覚えて、毎年決まってお祝いをしていたのです。例えばその祭りには、過ぎ越しの祭りも含まれていました。これは奴隷として囚われていたエジプトの地から、自分たちが助け出されたことをお祝いするものでした。特に神様がなされたあの十の災いの最後、門柱と鴨居に羊の血が塗られていれば、主はその家を通り過ぎられるけれども、塗られていなければ、その家の初子は殺されるというものがありました。そしてそれはまさにそのとおりに起こったのです。イスラエルの民は、主があわれみをもって通り過ぎてくださったときのみわざを思い出しながら、神様の偉大な働きを毎年祝っていました。この「祭り」ということばは、年に1回行われている祭りのことを表していました。

②新月

次に、「新月」ということばが続いています。これは新月祭と呼ばれる祭りのことを指しています。先ほどは年に1回でしたが、これは毎月1回行われていたお祝いでした。どんなタイミングで行われていたのか、民数記28章を見ると、その様子を見て取ることができます。民数記28：11、14に「：11 あなたがたは月の第一日に、【主】への全焼のいけにえとして若い雄牛二頭、雄羊一頭、一歳の傷のない雄の子羊

七頭をささげなければならない。」「:14……これは一年を通して毎月の、新月祭の全焼のいけにえである。」と書いてありました。新月祭というのは、毎月の初め第一日に行われるお祝いだったのです。

③安息日

そして最後に「安息日」とありました。これは年に1回でも、月に1回でもなくて、毎週祝われていた祭りでした。イスラエルの民は、神様が創造の後7日目に休まれたということ覚えて、また、エジプトの地から助け出されたことを記念して、この日を聖別して祝っていました。

毎年1回、毎月1回、毎週行われていた祝日に関するところがここに記されていたのです。そして、そんな祝日は、イスラエルの民にとって非常に大切なものでした。この戒めに従うということは、律法に欠かせなかったのです。彼らは食事と同じように、代々そのことを忠実に実践し続けてきました。そしてこれ自体はすばらしいことでした。でもにせ教師たちは、この祝日に関する律法も、食べ物と同様に、自分たちがそれを守っていることに誇りを、高ぶりを覚えるようになっていました。神様を心から愛して従うのではなく、彼らの心は神様から離れていたのです。そして、異邦人であるコロサイの信仰者たちに対しても、彼らは同じ基準でならうことを強いていたのです。

新約の時代を生きる信仰者たちは、ユダヤ人が守り行ってきた祝日に関する戒めには縛られてはいません。パウロはローマ14:5-6でこのように述べていました。「:5 ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。:6 日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。」と。ある人たちはこの日は大事な日です、この日は特別な日ですと言います。ある人たちはどの日も同じだと言います。そしてそれはどちらも全く問題ないのです。それぞれが自分の心の中であって、確信を持って、神様の前に正しいと思うのであれば、神様の前に喜ばれると思うのであれば、その日を守ることは別に間違っていることではありませんでした。それぞれの選択だったのです。でも問題だったのは、それを自分勝手にさばくことでした。聖書が言っていないことを振りかざして非難するという、そんな批判的で外側の行為だけを強調する律法主義は、そこから離れなくてはならない危険な教えでした。

そして、こうして聖書が言っていないことを振りかざして、自分勝手に自分の基準でもって、批判的に相手をさばくことは、別にこの当時だけの問題ではありません。私たちも気を付けていないと、霊的な高慢に陥って、ほかの人を自分勝手な基準でもって自分勝手にさばいてしまうことがあります。それはもういろいろなところで、いろいろな形で起こります。例えばそれは教会の中で起こるかもしれません。自分自身が忠実に仕えようとしている中であって、何もしていない人を見ると、あの人には怠惰な人だと心の中でさばいているかもしれません。自分自身がきちんとした服装をして教会に来ている中で、そうでない人を見たときには、あれはおかしいでしょうと心の中で非難しているかもしれません。また、それは教会の外で起こるかもしれません。人の食べている物とか、人の持っている趣味や持ち物を見て、それはクリスチャンにはふさわしくないだろうと、自分の基準に基づいて勝手に非難しているかもしれません。自分の好みや自分のやり方に合っていなければ、自分の習慣に沿っていなければ、みことばの基準がどうであれ、見えないところで中傷したり、陰口を口にしているかもしれません。もちろん聖書ははっきりと罪だと教えているものは、相手にきちんと教えてあげなければいけません。でも、時に私たちは、聖書が教えていないものに対して、自分の好みや自分の経験、自分の基準で判断して、人々の外側だけを見て非難することがあります。自分自身が持っている基準を勝手に人々に当てはめて、それによってさばくことがあるのです。これはとても危険なことです。そうやってさばいているときの自分の心は、いったいどうなっているのでしょうか？間違いなく言えるのは、神様に対する愛が欠けているということです。キリストのような愛や忍耐を示すのではなくて、自分自身の正しさを証明することにとらわれているのです。そのような批判的な態度は間違っているということです。

律法主義の人たちがとっていた態度はそれでした。だから私たちは、私たち自身の心を探ってみることです。自分の歩みを振り返って問いかけてみてください。あなたは普段、自分の思いを、自分の基準を振りかざそうとしているのでしょうか？それとも神様とそのみことばの權威に自分がへりくだることを進んでしているのでしょうか？もし神様を無視して、自分の望みを満たすことに心が囚われているから、人々をさばいているのであれば、その罪を神様の前に素直に告白して悔い改めることです。律法主義の人たちは、批判的な態度でもって、人々を自分の基準に当てはめてさばっていました。私たちはそんな態度から離れなくてははいけません。

律法主義の危険性というものをよく理解していたパウロは、こうしてコロサイの兄弟姉妹たちに対して警告を与えていました。そして、警告を与えた後で、ある意味皮肉とも取れるようなことばを、続く17節でパウロははっきりと口にします。「これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。」と記されていました。ここに出てきていた「これら」というのは、16節に出ていた食べ物や飲み物、祭りといったものに関する律法のことでした。これらはすべて「次に来るものの影」ですと、パウロは言うのです。「影」というのは何のことを言っているのでしょうか？それを考える上で、そもそも「影」というのはいったいどんなものなのでしょうか？例えば、私たちは地面に映っている影を見ると、そこに映っているものの大まかな形を想像することができます。私たちは、影を通して形を想像することができるのです。でも同時に、私たちがその影をたとえどんなに熱心に眺めていたとしても、そこに実体はありません。その実体に触れることはないのです。影は影です。パウロは、律法というのは影なのだと言うのです。

では、本体はどこにあるのか、実物はどこにあるのかと言うと、「本体はキリストにある」と言います。この「影」について、ヘブルの著者もこんなふうに述べていました。ヘブル10：1に「:1 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。」と書いています。言われていたことは明白でした。律法には後に来るすばらしい物の影はあるけれども、実物はない。実物がないから、残念ながら律法には人々に救いを与えることや罪の赦しを与えること、人々を完全にすることはできないということです。たとえ律法をどんなに一生懸命に守り行ったとしても、それによって義と認められることはありません。人の行いには人を救う力はいっさいないのです。影にその力はないのです。律法は人々に罪を突きつけました。律法は人々に対して、人の行いがいかに無力なものかを突きつけました。でも同時に、律法というのは、人々に救い主の必要性を突きつけるのです。自分自身の熱心な行いや力が、神様の求める完全なきよさに達することができないということを明らかにして、人々の目を影ではなく、実体に、キリストに導こうとするのです。

今回、2個の律法を見ました。食べ物に関する律法を見ました。食べて良い物と悪い物を、たとえ忠実に守り続けていたとしても、その行いによって永遠のいのちが得られることはありませんでした。そこにはいつも飢え渴きがあったのです。でも、イエス様が来られた、今は違いました。イエス様はご自身のことをこんなふうに表現されていました。ヨハネ6：35に「イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」とされていました。食べ物に関するその戒めは、私たちの行いが決して神様の基準を満たすことがないということを明らかにしました。そんな中であって、イエス様は「わたしがいのちのパン」なのだと言うのです。わたしに来る者には永遠のいのちを与えてくださると約束してくださったのです。イエス様にあって本当の満足がありました。イエス様にあって人はもう決して飢えることも、渴くこともなかったのです。まさに律法は影であって、キリストが本体でした。

食事だけではありません。祝日や祭りに関する律法も同じでした。人々がどれだけ懸命に祭りの戒めを守っていたとしても、そこに本当の赦しはなかったのです。でも、イエス様が来られた今は違います。

みことばはイエス様のことをこんなふうに表示していたのです。Iコリント5：7に「……私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」と書いてありました。祝日に関する戒めというものは、私たちの行いが決して救いをもたらさないことを明らかにしていました。その中であって、過ぎ越しの小羊であるキリストの十字架のみわざにあって、この方を信じるすべての者に罪の赦しを与えられるのです。キリストの尊い犠牲のゆえに、私たちに救いがありました。まさに律法は影で、キリストが本体でした。

こうして律法には決してできないことをキリストは成し遂げられました。キリストが本体でした。そして、そんな十分なキリストを覚えるときに、パウロはある意味皮肉を込めて改めて言うのです。何の实体もない、次に来るものの影をいつまでも追い求め続けるのですか、律法を守り行うことを続けるのですかと。それともすべてにおいて十分な、本体であるキリストにあって満足するのですかと。私たちにとっても同じ真理です。私たちの救いというものは、初めから終わりまで、それぞれの行いのわざによるものでは全くありませんでしたし、霊的な成長も、私たち自身の単なる努力によるものでもありませんでした。すべてがキリストの恵みと力のみわざによるものだということを、私たちは忘れてはいけません。私たちはキリストにあって救われて、キリストの恵みの力によって成長し続けていくのです。このキリストは十分なものでした。私たちの行いではありません。このキリストがすべてであって、この方にあって救いがあり、この方にあって霊的な成長があるのです。だとすれば、私たちにできることは、この方の恵みを覚えて感謝をし続けていくことです。この方を見上げて、この方に恐れをもって、この方を何よりも愛しながら、ともに続けて歩んでいきましょう。